

明石の史跡（3）善楽寺と善光寺如来



犬公方から忠臣蔵まで、華やかな話題に彩られた元禄。その末年ともいえる元禄17年（1704）の2月17日から3日間、善楽寺（大観町）において、善光寺阿弥陀如来の御開帳がおこなわれた（累年覚書集要）。明石藩内の各所に案内の札が立てられ、大きな話題となり、多数の人々が、御利益を求めて参詣し、門前市をなしたことが予想される（このことは『明石名勝古事談』や、信頼度の高い「明石市史年表」にも見えない）。

開帳というのは、「社寺が日ごろ厨子のなかに安置秘蔵する神仏・霊宝などを、一定期間公開し広く人々に拝観」させることで、居開帳（社寺の所在地）と出開帳（他所に出張）に分類される（国史大辞典）。善楽寺で実施されたのは出開帳で、その目的は、当初はともかくも、このころには経済的効果を意図したものであった。ただあまりにも開帳が盛んとなるにつれ、享保5年（1720）には、開帳の間隔が33年と定められた。

善光寺の阿弥陀如来（1尺5寸）は、欽明天皇13年に百済国より渡来したもので、推古天皇の勅命により、同10年（602）に信濃国へ移したという（扶桑略記）。善光寺は元禄13年（1700）7月の出火により焼失。しかし、幕府は松代藩に命じて、同16年（1703）より普請が始まる。善楽寺での開帳は、まさに復興事業の一環であったことがわかる。と同時に、善楽寺が選ばれたのは、港町明石の繁栄を裏付けるものといえよう。この次に明石藩内に善光寺如来が姿を現すのは、寛政8年（1796）の廻国途中、淡河町（神戸市北区）に止宿している（累年覚書集要）。



日本歴史学会会員 茨木 一成

善楽寺